

差異の継承と発展

——カトリック・ソルブの祈禱・聖歌集『ヴォ
サドニク』における「民族色」の形成——

木村護郎

一 『ヴォサドニク』への問い

宗教が言語の維持や取り替えの大きな要因となりうることはたびたび指摘されてきた⁽¹⁾。ある言語に対する宗教の直接的な働きかけとしては、宗教的な書物や祭礼の言語への採用をあげることができ、しかし言語の維持・取り替えに関する宗教の働きを考えるためには、言語共同体に対する宗教の作用を含めて考察する必要がある⁽²⁾。本稿では、ドイツ東部のスラヴ系のソルブ語の言語共同体に対する宗教組織の働きかけの一端を分析することによって言語共同体と宗教の関係の研究に寄与することをめざす。

ソルブ語は現在、話者が七万人に満たない「少数言語」である。しかし圧倒的多数派の非ソルブ語話者に囲まれ、かつ完全にドイツ語との二言語併用者によって支えられる状況にありながら、日常の社会生活においても使用される場を持つ言語であり続けている⁽³⁾。

ソルブ語の活力の背景を考える上で看過できないのが、言語

維持と宗教的な帰属の相関性である。ソルブ語地域は宗教改革後、領土帰属などの関係で九割以上がプロテスタントになり、宗教改革以後も存続した修道院領の町村を中心とする一部地域のみがカトリックにとどまった。しかしプロテスタント地域では、ドイツ語への同化が進展した結果、ソルブ語能力を持つ人はいてもソルブ語は地域の日常生活の言語としてはほぼ失われ、今日ではカトリック地域(約一万五千人)が事実上、ソルブ語の中核地域になっている⁽⁴⁾。このように言語維持と宗教分布がかなり正確に対応しているため、ソルブ語は、言語の維持に対する宗教の役割を考察する格好の事例を提供している。

カトリック地域でソルブ語がより保持されたのはいかなる事情によるのか。この問いが本稿の出発点である。これに対する答えは必定、複雑なものにならざるを得ないが、この問いに答える作業の一環として本稿では地域のカトリック教会自体に注目⁽⁵⁾、その活動の重要な部分でありながらこれまで十分注目されなかった教会の出版に光をあてる⁽⁶⁾。

ただし、教会のソルブ語共同体に対する作用は時代によって異なるだろう。本稿では考察の対象を一九四五年以降に絞る。第二次世界大戦前までカトリック・ソルブ地域の中心的な村々では住民の大多数がカトリックでソルブ語話者であった。しかし大戦後は、中東欧から流入したドイツ系避難民にカトリック信徒が含まれていたことなどによって、カトリック・ソルブ地域の教会も非ソルブ語話者の信徒を相当数含むこととなった。このような状況において地域の教会はソルブ語共同体に対してどのような志向性を示してきたのか。

カトリック・ソルブの雑誌記事に、ソルブ語のミサなどで使用する祈禱・聖歌集『ヴォサドニク』(vosadnik: 以下W)を「民族的教育に使う」と呼びかける一節がある。ソルブ語共同体を対象とする宗教書の代表格Wには「民族的」と認識される何らかの独自性があるのだろうか。本稿ではWの「独自性」を同一地域・教会で使われるドイツ語の祈禱・聖歌集『ゴッテスロープ』(Gotteslob: 以下G)⁹⁾との差異に注目して抽出することによって、地域の教会がソルブ語共同体に対して示す志向性への一つの視点としたい。

二 構成上の差異

では、祈禱・聖歌集の分析に入る。まずWとGの目次の比較によって構成上の差異を考察しよう。GはI 個人的な祈り、II 秘蹟、III 教会暦、IV 聖徒の交わり、V 共同の祈禱、の五部構成であり、また祈りと聖歌が混在する。これに対して現行版のWは書物の前半が祈り、後半が聖歌、と分かれている。前半の祈りの部分はI 日々の祈り、II 教会暦、III 諸儀式と、Gより簡明な三部構成になっている。前半が祈禱、後半が聖歌という区分はWの各版共通だが、祈り編の三部構成は七七年版において明確に導入されたものである。七五年にGが刊行された後にWがあえて独自の配列を採用したことは、Gとの構成上の差異化を図ったものといえよう。

では、Wの収録内容はどうか。七七年版のWの巻頭言には、編集方針について「先の数世紀において多くドイツから入ってきたとすれば、私たちは隣人たるスラヴにより注目し、

また「ソルブ」独自の作品をとり入れるように配慮した。」という一節があり、Gとの内容的な差異を予想させる。

三 内容上の差異 1: ……祈り編

(1) 「ソルブ」民族への言及

本章以下ではGに対するWの内容的な差異及びその変化を考察するが、はじめにW各版の前半に収録されている各種の祈りについてみていく。

Gと異なるWのもっとも顕著な特徴は、「(ソルブ)民族」に言及される祈りの存在である。そしてその言及は改訂の度に著しく増え、五一年版では二か所であるが、六〇年版では一〇箇所、七七年版では一八箇所となる。しかしこの言及の増加は祈り編の拡充に伴う単なる量的な変化ではなく、質的な変化を伴うものである。以下で、言及のされ方を検討しよう。

① 祈りの主題としての「(ソルブ)民族」

各祈りには表題がついているが、Wには「民族」が表題に含まれる祈りが存在する。五一年版には、さまざまな対象を持つ祈り(「〜のための祈り」: 103-110)の中に、さまざまな信徒や聖職者などいずれも宗教的価値の高い対象のつづいた最後に「民」[*lid*]と国「土地」(故郷) [*kraj* (*domizna*)] のための祈り」という祈りが置かれている¹⁰⁾。

「全能の永遠の神よ。(中略) わが民族 *nas lid* をかえりみてください。これはあなたの民 *twój lid* です。」(110. 冒頭部分)

この祈りにおいては「*lid*」という語が「*nas*」(一人称複数)と

「twoj」(二人称単数)という所有冠詞をつけた形ででている。ドイツ語の「Volk」に相当する「Iud」は一般的に用いられる場合は「人民」という意味で使われるが、人々の範囲を限定する場合、「民族」という意味になる。⁽¹²⁾「twoj Iud」の場合「神の民」という意であるのに対して、「われわれの」という限定がつく「nas Iud」の場合、「民族」という意味がより前面に出るといえよう。

六〇年版では、この祈りは表題を「民〔族〕と国〔土地〕のための祈り」と徴修正して、内容はほぼ同じ文言で受け継がれた(326 sq.)が、さらに「さまざま願ひ」の中に「わが民族 nas Iud とわが祖国 nasa wotcina のための願ひ」という祈りが加わり(347 sq.)「民族」を主題に含む祈りが2つになる。後者では「nas serbski Iud」(わがソルブ民族)(347 sq.)はソルブの自称(と)はじめて「Iud」に固有名がつく箇所がある。これによって、前版では「ソルブ」を暗示するのみであった「nas Iud」の意味が明示化され、この祈りは他の祈禱集との互換性を失う。つまり、そのまま例えばドイツ語に翻訳して使うことはできなくなる。祈りの一般的妥当性を犠牲にして「ソルブ」を強調する選択がなされたのだ。

七七年版においても「民族」が表題に掲げられているのは六〇年版と同じく二箇所であるが、内容に大きな改変が加えられている。「教会と教区のためのさまざま祈り」の中に、「世界の教会」や「教皇」から「教区の聖職者」、「教区」まで、宗教的価値の高い対象が並ぶ間に当然のごとく紛れ込んでいる民族と国のための祈りでは、表題が「民〔族〕Iudと国〔土地〕の

ために」から「わが民族 nas Iud と国〔土地〕のために」になった他、祈りの中で「わが民族 nas Iud」が「わが小さな民族 nas maly Iud」に変わる(102)。こうして以前の各版の対応する祈りにあったあいまいさは取り払われ、「Iud」が「民族」しかも限定的に少数民族ソルブを指すことが明確になる。もう一か所の、「願ひ」の方では、表題が「地方自治体、民族 narod、国家 stat のための願ひ」に改められる(348 sq.)。すなわち「Iud」が明確に「民族」を指す「narod」に変わると同時に、「wotcina」(祖国)という感情を含んだ表現が——特定の土地の範囲を指す「kraj」(国〔土地〕)でもなく——感情付与を排して制度的な国家を指す「stat」に変わる。⁽¹³⁾ 文言も刷新され、文中でも「narod」が使われる。

このように、Wにおいては祈りの中で「民族」や国が宗教的な対象の間に並列されているが、版を重ねるごとに、「民族」が限定され、強調されるとともに、国が客観的な制度としての位置づけに変えられる。このことは、自己同一化の重点が「祖国/国」より「民族」に移行したものであるといえよう。

② 加護・祝福の対象としての(「ソルブ」民族)

次に、「民族」が表題に掲げられている祈り以外の祈りで「ソルブ」民族」に言及される例をとりあげる。まず、「民族」が加護や祝福を受ける対象となっている祈りがある。⁽¹⁴⁾

五一年版においては、教区の守護聖人など地域の教会で何らかの位置づけを与えられた聖人への崇敬の祈りの中の「マイセン司教区及びヴォトロウ〔教区の一つ〕の教会の守護聖人である聖ペノへ」という祈りに「serbski kraj」(ソルブの地)とい

う直接の言及がある他、「nas lud」も大きく二教派に分かれているソルブ民族を特に指している」と解釈できる。

「あなたに委ねられた群れのよき羊飼いである聖なるペノよ、あなたはマイセン及びソルブの地 serbski kraj の羊「信徒」をキリストの教えの糧で満たしたもうた。(中略) わが民族 nas lud の中に一人の羊飼いと一つの群れのみがありますようじ。アーメン」(194)

六〇年版にも五一年版と同じ文言のペノへの祈り (427 sq.) がある。しかし、五一年版では、これ以外で「民族」という単位はみられなかったのに対し、六〇年版ではさらに五箇所の祈りで、加護を求める対象に「nas lud」が含まれる (141, 157, 325, 368, 434)。

七七年版では、ペノへの祈り (412) の他、教会の祝日の祈りなど一四の祈りで「民族」(“nas lud”: 167, 173, 279, 281, 346, 357, 424 sq., 428; “nas serbski lud”: 164, 254, 280, 354, 356, 413) が祈りの対象の単位に含まれている。六箇所で民族名が明示されていることに注目したい。

このように、当初は、地域の聖人への祈りでのみ「(ソルブ) 民族」への言及があったのに対して、改訂の度ごとに W の想定する祈りの対象の単位としてより多くの箇所でも、またより明確に「(ソルブ) 民族」が登場する傾向がみられる。

③ 祈りの課題としての「(ソルブ) 民族」

② でみた箇所はいずれも「lud」が加護と祝福を願う対象として現われていたが、これとは質の異なる言及が登場するのが六〇年版の「聖家族への祈禱」においてである。ここでは、「私

たちの中の父母たちに教会と民族 narod の将来に対する思いを呼び起こしたまえ。」(150) という句が現れ、「民族」に関わる事柄が祈りの内容的な課題となるに至っている。こののみ、② で挙げた各例のような「lud」ではなく、明確に「民族」を指す「narod」が使用されて「民族」という集団区分が強調されていることも注目に値する。⁽⁶⁾

「民族」を表題に掲げた祈り以外の祈りで民族的内容が祈りの課題にまでなっている箇所は七七年版では二か所にみられる。「*vo majem znanii*」の中の「わがソルブ民族 nas serbski lud が存続し、この地の諸民族 ludy の間で名譽ある地位を占めることができましように」(354) という句と、「諸聖人への崇敬の祈り」の中の「われわれのうちに教会と民族 narod への愛が保たれますように」(428) という句である。これらの祈りにおいて、地域の教会が「(ソルブ) 民族」の存続を信仰的な課題とみなしていることがうかがえる。

以上①から③でみてきたように、五一年版でみられた「民族」(lud) への言及は以降の各版で増加・発展する。六〇年版においては、固有名詞の付加や narod の使用、さらには「民族」が祈りの課題となることによって質的にも強化され、七七年版においては言及がさらに多くの祈りに拡散するとともに、文言の大幅な改訂によって一段と強調されている。このような変化によって、W は次第に、ただソルブ語を使用する祈禱集であるのみならず、「ソルブ民族」という主体によって使用されるものとしての性格を示すようになった。

(2) 聖人崇敬におけるソルブ及びスラヴ圏への志向性

「民族」への直接的な言及の他に、祈りでもとりあげられる聖人に関してもWの独自性が現れている。まず、崇敬の祈りの配列に注目しよう。各版とも、マリアなどの代表的な聖人や、各教区教会の守護聖人などカトリック・ソルブ地域において特に何らかの位置づけを与えられた聖人への代願を求める祈りが収録されている。その配列は五一年版では単純に聖人の記念日の日付順であったが、六〇年版以降は、ソルブ地域で特に崇敬される聖人への祈りが「私たちの故郷の聖人への祈り」(1990: 424 sq.; 1977: 424 sq.)としてまとめられ、ソルブ(地域)に関連性があるとされる聖人が区分けされた一群を形成するようになる。ここでは、ソルブ(地域)を教会内の一つの単位として位置づけようとする発想が現れている⁽¹⁷⁾。

しかしとりあげる聖人の選択については、地域性のみならず、「民族」的観点が含まれる。五一、六〇年の各版ではいずれも「司教区の守護聖人」とされていたベノは、七七年版では「ソルブ民族」の守護聖人」との肩書をも付与される(司教巻頭言)。またベノ以外に五一年版では「民族色」の濃い聖人として「スラヴ諸民族」の使徒「キュリロス及びメトディオス」が含まれている(194 sq.)。六〇年版ではこの両聖人の「肩書」が「わがスラヴの兄弟姉妹の使徒」(436)と、より感情的な側面の強い表現に変わっている他、新たに「聖ヴァーツラフよ、兄弟チェコ民族 *ceski narod* の指導者たるあなたはわがソルブ民族 *serbski narod* の聖人でもあります」という語句で始まるヴァーツラフへの祈りが加わる(456)。七七年版ではスラヴとのつながりについてさらにルドミラ、ヴォイチェフ、ヤ

ン・ネボムツキー、コルベ神父など、ポーランド・チェコの国民的聖人がつけ加わる(457 sq.)。

以上のことから、版を改めるごとにスラヴ圏への接近を含む「ソルブ色」の強化が進行していることがわかる。「ソルブ」という単位のみならず、強調されると同時に、崇敬対象について、同じ地域、同じ教区内の非ソルブ語話者の信徒との差異がWの中で積極的に形成されていくのだ。

(3) 『ヴォサドニク』の「独自性」の独自性

以上、祈り編についてソルブの独自性と考えられる要素をとりあげてきた。このような「独自性」はW全体の中では少数である。しかし五一年版に萌芽的にみられた内容的な「独自性」は改訂の毎に版を重ねるにつれて量的にも質的にも発展させられる方向で変化していることが示された。「(ソルブ)民族」は次第にWの中で想定される祈りの主体として浮かび上がってくる。そしてこの集団にとって、国は感情的な含意を排して客観的な制度としての位置づけに変更される一方、この集団はより明確に(西)スラヴ圏の一員として意識されていく。目立たない、しかし確固たる重点の置き方のシフトが行われているのだ。では、Wと同一地域で使われるGにおいて「民族色」、「地域色」はどのように現われるのであろうか。「Volk」という語はかなり多く登場するが、単数形の「Volk」の場合はほとんど教会を「*dein/sein Volk*」(あなたの/彼の民=神の民)と呼ぶ用いられ方である。単数形で民族の意味が出ているのは「私はある家族、ある民族 *ein Volk*、ある特定の時代の人類の中に生まれてきました」(135: 梅俊・告解のための「良心の鏡」)

という一般的な意味あいでの言及が、一か所あるのみだ。また、祈りの対象として特に挙げられているのは教皇、司教、聖職者、教会の統一、教区、世界宣教といった宗教的な対象に限られ、民族（や国）は現われない。聖人の選択についても、聖書的、一般教会史的に重要な人物が挙げられているが、本文中にドイツ語圏の特定の民族、地域を代表する聖人は表れない。

Wの祈りの「独自性」が全体としては少数であったとしても、Gとの対比においては、そのような「独自性」が現れていること自体が、ドイツ語圏で広く使用されるGと異なって使用地域・使用者が限定されていることを活用した、Wの特筆すべき独自性といえよう。

四 内容上の差異 2……聖歌編

(1) 歌詞にみられる『ヴォサドニク』の特徴

次に聖歌について見ていく。Wでは聖歌も版を重ねるにつれて収録曲が増えていく。⁽⁸⁾まず歌詞に注目しよう。歌詞内容にソルプとの関連性が明示化された歌は五一、六〇年版ではどちらも六曲ある。それぞれキュロス・メトディオスの歌（六二六番・一九五〇年作詞）、ペノの歌（六二八番・一九三九年作詞）、ソルプに祝福を願う歌詞が含まれる曲（三六五番・一九五〇年作詞）及びカトリック・ソルプ地域にある巡礼地ルジャントの巡礼歌が三曲（五七四、五七五、五九二番・作詞・一九三三、三七、四〇年）である。

ソルプと関連する歌詞を持つ歌は七七年版ではさらに二曲加わって八曲になる。うち一曲はソルプに祝福を願う箇所が含ま

れるもの（六四八番・一九六九年作詞）だが、もう一曲（神よ、あなたはソルプを導きたもうた）は聖歌としてはじめてソルプを直接に主題にしている（六四九番・一九七五年作詩）。これはポーランドの愛国的聖歌『Boże coś Polskę』（神よ、ポーランドを）を翻案したものだ。

以上のように、Wの収録曲にソルプとの関連性が歌詞として現れるのは今世紀三〇年代以降であり、また、祈りと同様、改訂による「民族色」の質的、量的拡大がみられた。

これに対して、Gの場合はどうであろうか。Gに収録された聖歌で地域性が収録の動機となったと考えられる歌として、ドイツ宣教をおこなったポニファティウスの歌（八五二番・一九七四年作詞）があるが、その中に民族・地域が歌詞に具体的に登場する箇所はない。Wにおいて聖歌にソルプ関連の内容が含まれているものは祈りに比べてもなお少ないが、Gとの比較においては聖歌における民族・地域への言及性自体が多分に特徴的である。

(2) 旋律の差異化

しかし歌に関しては旋律にも注目する必要がある。はじめて楽譜が付くとともに作曲者、年が記されるようになった七七年版についてみていく。⁽⁹⁾まず、入祭文や「聖なるかな」など、典礼の基本的な構成要素に属する通常文（三二二―三八一番）に独自の旋律がつけられていることがあげられる。W収録の通常文用の五九曲中、半数以上の三五曲が一九四五年以降のソルプの作曲者の手によるものであり、W以前の代表的なソルプ語の聖歌集（一七八七七年刊）によるものが一九曲である。その他の、

主にドイツの作曲者による曲は五曲のみだ。

一般の聖歌もGの収録曲とは大幅に異なる。七七年版の全四三〇曲中、年代が不明のものもあるが、少なくとも一二五曲以上が一九四五年以降のソルブのオリジナルの作曲である。またソルブの民謡や過去のソルブの聖歌集、第二次大戦前のソルブの作曲者の作品が一二〇曲以上ある。合計すると聖歌の優に半数以上はソルブのオリジナル曲ないしソルブの伝統による曲ということになる。また上に挙げた(一二七頁)巻頭言で、スラヴ圏から作品を取り入れたとあったが、出自が明らかかなものだけでポーランドから二〇曲、チェコから一〇曲収録されている。その他、黒人霊歌(六七九、六八一番)やフランスのルルド巡礼歌(六一九番)など、Gにはない外来の曲も含まれている。これらもGとの対比においてはWの「独自性」となる。

このように、旋律に関してはWの「独自性」が存在し、一九四五年以降に著しく拡大された。ソルブ語とドイツ語のミサの差異は非言語的な特徴によっても補強されているのだ。

五 おわりに

以上考察したように、Wは、ただ使用言語がドイツ語圏の教会と異なるのみならず、書物の構成や内容においてもGと差異化されている。そして、これらの差異はただそのまま受け継がれたのではなく、改訂の度ごとに発展してきた。五一年版には萌芽的にみられるにすぎなかった「ソルブの独自性」は版を重ねるにつれて強化され、一方では「民族への言及や独自の聖歌の導入などによって「民族的」要素が明示化されるようにな

り、他方では西スラヴ圏を中心にカトリック世界へのつながりを独自に求めていくようになっていく。カトリック・ソルブの教会の中に、ソルブ語共同体と周囲の非ソルブ語話者との間の既存の差異を保つのみならず、「民族色」として新たな差異を創り出そうとする志向性が存在したといえる。カトリック地域でソルブ語が現在に至るまで残ったことについては、このような教会内の差異化の志向性を含めて考える必要があるだろう。

ミサに地域的な独自性を取り入れることについては、多様性の尊重を打ち出した第二バチカン公会議(一九六二―六五年)と関連づけて考えることもできよう。しかしWにおける独自性は公会議以前からみられるものであり、また特定の「民族」を宗教的に価値づける内容は公会議の姿勢をこえている。一九四五年以降のWにおけるGとの差異化の進展はカトリック教会の一般的な傾向に還元できるものではない。むしろプロテスタントのドイツ語圏に囲まれた中でソルブ語共同体と結びついて存続してきたカトリック・ソルブ地域の教会の、同一教区内で両言語の使用が拮抗するようになった状況への一つの反応とみるべきだろう。

現行版刊行から二〇余年がすぎた現在、二一世紀初頭の完成をめざしてWの改訂作業が進んでいる。新しいWは現行版をどのように継承、発展させていくのか。Wは今後も、ソルブ語共同体に対する教会の志向性を考察する際の重要な一素材となるだろう。さらに、宗教の実践と密接に関係する祈禱・聖歌(賛美歌)集は、ソルブに限らず、キリスト教圏において、言語の維持・取りかえに対する宗教、とりわけ教会の役割を考察

する際の一つの視点となるのではないだろうか。その際には、本稿で扱えなかった祈禱・聖歌（讚美歌）集の使用の実際を、教派や地域ごとの使用形態の特色とあわせて調査する研究がまたれる。

(1) 宗教が少数言語の維持や取り替えの両方向に働く可能性についてはアメリカ合州国の移民に関する Hofman 1966 が言語維持・取り替え研究初期の代表的な研究であるが、Moelleken 1996: 395-396 がそれ以降の幾つかの代表的な研究の概観を示している。

(2) ここで使用する「言語共同体」の概念は、設定されたある言語（ここでは「ソルブ語」）の話者の集合を指す。これは言語以外のなんらかの共通性ないし地域的集住性や固定的な境界の存在を前提とするものではない。宗教組織による言語共同体の扱いの諸相については、Hofman, op. cit. の「エスニック教区」Ethnic Parish に関する議論参照。

(3) ドイツ民主共和国のソルブ語に対する促進的な政策によってソルブ語を授業用言語とする学級が設置されているが、その前提となっているのが、家庭においてソルブ語を使用する子どもの存在である。学校のソルブ語教育については木村一九九七参照。

(4) カトリック地域は実際の日常的なソルブ語使用者の三分の二を擁するとされる (Ejle 1991: 25)。上述の、ソルブ語で授業を行う学級もいずれもカトリック勢力が残った

地域に分布する。

(5) ドイツ語とソルブ語の二言語能力が要求されるため、聖職者など地元の教会の指導層はほとんどソルブ出身者が占めることを付言しておく必要がある。

(6) 地域の教会の出版物については出版史の概観を示す Piech 1994 以外ほとんど研究がなかった。現在、カトリック・ソルブの雑誌に関する著作 (Waldá 未刊) が準備中である。

(7) *Katolski Posol* 20. 9. 1964, 107。

(8) W の歴史は一八八八年に遡るが、第二次大戦後は一九五一年、六〇年、七七年にそれぞれ大きく改訂された。カトリック・ソルブでは教会の行事への出席が一種の社会的規範となっている (Waldá 1998: 100) ため、教会行事で使用される W はソルブ語の出版物の中で破格に多い発行部数を持つ。五一年版は不明だが、六〇年版は一万二千部、七七年版は次代まで考慮の上カトリック・ソルブの総数を上回る二万部発行された。なお、ソルブ語の新約聖書（一九六六年刊）は四千部だ。

(9) 一九七五年刊（九八年・第一〇版）。ドイツ語圏共通。大きな内容改訂は行われていない。

(10) 一九四五年以降の各版は改訂の度に内容が増加し、五一年版から七七年版までに頁数が二倍以上に増えている。七七年版に収録された祈りは、通し番号で数えると、二六九種に及ぶ。なお、本稿では、参照の便宜上、祈りの出所は通し番号ではなく、頁数を示す。

- (11) ここで「国」「土地」と訳した「*Kraj*」はドイツ語の「Land」に相当し、必ずしも行政単位としての国を指さない。なお、明快さのため、以下、ソルブ語の格変化は原形に直した。
- (12) ヘルリンの壁の崩壊からドイツ統一に至る過程で標語が「Wir sind das Volk」(我々が人民だ)から「Wir sind ein Volk」(我々は同じ民族だ)に変わったことが想起される。
- (13) 「*Wórcina*」は六〇年版では他所にも登場するが七七年版では一か所も使われていない。
- (14) 六〇年代に、政府のソルブ政策は積極的促進から消極的促進に転じる(木村一九九七)。七七年版のWにおける国家の位置づけの変化はこの政策転換を受けたものとも考えられる。
- (15) 聖人の「肩書」における「(ソルブ)民族」への言及については(2)で別に扱う。
- (16) 「*narod*」は、六〇年版ではこの個所及び(2)でとりあげる聖人への折りに登場する。
- (17) カトリック・ソルブ地域は教会行政上はなんら独自の単位をなしていない。
- (18) 三五六曲(五一年版)・三九四曲(六〇年版)・四三〇曲(七七年版)。以下、聖歌の番号は七七年版のものを示す。七七年版ではWの通し番号で三〇〇番から七三〇番が聖歌編である。
- (19) それ以前のWは歌詞のみの掲載であり、旋律は教区に

とに異なっていることもあった。

文献

- Die Bischöfe Deutschlands und Österreichs und der Bistümer Bozen-Brixen, Lüthich und Luxemburg (1975 (1998: 10)): *Gotteslob*, Leipzig
- Elle, L. (1991): Die Sorben in der Statistik, in: Matcica Serbska (Hrsg.): *Die Sorben in Deutschland*, Bautzen, 21-25
- Hofman, J. E. (1966): Mother Tongue Retentiveness in Ethnic Parishes, in: Fishman, Joshua A. (ed.): *Languague Loyalty in the United States*; London/The Hague/Paris
- 木村護郎(一九九七)「学校における言語教育にみる少数言語の動向」角谷英則編『不老町だより』二号、三七—四二頁
- Katolski Posol*
- Moelleken, W. (1966): Multilingualism in Religion, in: Goebel et. al. (Hrsg.): *Handbuch Kontaktinguistik*, Berlin/New York 391-399
- Pjehc, C. (1994): Nabožna literatura, w: Vóikel, Měrćin (red.): *Přinoški k stawiznam serbskeho pismowstwa lět 1945-1990*, Budyšín
- [Serbske Pastoralne Zjednocenstwo] (1951, 1960, 1977): *Wosadnik*, Budyšín

Waldta, M. (1998) : Serbska rěč w katolskej hornjej
Luzicy-na přikładze wosady Ralbicy, 94-101, w: Paska,
Helmut (red.) : *Serbsčina, Opole*
— [1998] : *Katolski Posol*, unverfentlichtes Manu-
skript

※ 本稿の執筆過程において筆者の質問に快く応じてくださった

また Merčin Salowski 司祭に謝意を表しておきたい。
Méjće mój wutrobny dzak za Wašu přecoelnu pomoc!

【一九九九年十一月一日 受稿】
【一九九九年十二月三日 受理】

(一橋大学大学院博士課程)